町長室からこんにちは No.18

一宮町長
馬淵 昌也

最近、中国の上海辞書出版社から、私が編集に携わった書物が出版されました。『「華厳経綱要」校釈』という題名です。中国の唐時代の僧・清涼澄観和尚（738～839）の著書『華厳経綱要』を活字化し、解説や校注などを加えたものです。大学教員だった頃に、中国仏教の研究者・林鳴宇氏に提案して企画したものです。

清涼澄観和尚の『華厳経綱要』は、『華厳経』というお経の思想はどういうものか、ということについて書いた本です。『華厳経』は、4世紀頃までに中央アジアでまとめられた大乗仏教の経典です。釈迦が悟ってまもなく説いたものだとされ、仏教で最も重要な経典の一つとされてきました。ただ、量も多くわかりにくいので、5世紀に中国語に訳されてから、中国の仏僧たちが研究を続けてきました。澄観和尚もその一人で、「『華厳経』は、全てのものは本質的につながっている、と説いているのだ」と考えて、修行の手引きに使おうとしました。

彼の考え方はその後の東アジアの仏教に大きく影響を与えました。日本では、東大寺にその学統が残っています。『華厳経綱要』は、澄観和尚の著作の中でも、最もコンパクトにまとめられたすばらしいものです。

ところが、この本は、中国ではほとんど流通しませんでした。その傍ら日本に伝わって、神奈川県の金沢文庫に、残されていました。この本の存在は、研究者の間で知られていましたが、長らく忘れられていました。私が2004年に、澄観和尚について論文を書こうと思い金沢文庫に出かけたところ、原本のコピーが作られていて、誰でも複写できるようになっていました。私は大変驚いて、早速読んでみたのですが、想像以上にすばらしい本でした。そこで、この本を再発見したことや、その内容について学会で発表しました。

今回の本の「解説」の骨子は、その折の原稿にもとづくものです。

その後、駒澤大学時代の先輩である林氏と相談し、林氏が、本文の校注を詳しく行ってくださり、このほど立派に出版となりました。長く忘れ去られていた名著を、千年以上の時を隔てて再度世に出す作業に関われたことは、私にとって、大変な名誉です。彼岸におられる澄観和尚も、喜んでくださっていると思います。大変嬉しく感じます。